
流星のロックマン ～時を越えた思い～

英 里子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 〜時を越えた思い〜

【Nコード】

N2407J

【作者名】

英 里子

【あらすじ】

世界を騒がせたメテオGの騒動から約二年後、“鬼門”と呼ばれる『あちら』の世界に繋がる門が何者かによって破られてしまった。

そのとき、過去二ホンを恐怖に陥れたウイルス的存在、“怨霊”が再び現実世界に現れ始めた――

く睦月之章く

1：始まり（前書き）

最初は流星の”り”の字も出てきません。

く睦月之章く

1：始まり

夜は深く、闇が世界を覆い尽くしている。

雲が割れ、月が顔を出したとき、初めて周りの様子が伺えた。

ここはどこかの社らしい。鳥居に御神木、境内、本殿…朱い柱に荘厳な装飾、随分と昔の建物のようなだが時が経っていることを忘れてしまうほどの美しさを保っていた。

束帯姿の男が鳥居をくぐり、社の敷居を跨いだ。

「御影様」

姿のないところから声が聞こえた。

「久しいな」

男がそういうと4つの影が現れ、その男の前に跪いた。

「はっ 3年ほどでしょうか ほんに…お久しゅうございます」

白い袴姿で白と黒の髪である少年がより低く頭を下げ答えた。

「そう堅くなるな それより……支度はよいのであろう」

男は尋ねる。

「あつたり前ですよ」

「うむ」

「へへへ… うずうずしてたまらねえな」

皆口々に答えた。

男もその答えに満足気に頷いた。

が、白の少年は重々しく男に問いた。

「されど… 些か時期が尚早にはございませぬか、御影様」
みかげ

御影と呼ばれた男は眉をしかめた。

「我々がどれほど堪えかねたか…… 忘れたわけではなからう、白連」
びゃくれん

「そのようなことは決して しかし、神無月の頃まで待たれては」

「ならぬ」

低く、そして憎悪がみられる面持ちでピシヤリと言い放つ男に恐怖を感じた。が、口を強く結び、少年は問い掛ける。

「何故^{なにゆえ}ことを急^せきましようか」

「……」

「堪えてきたではありませんか 故、確実な条件の元、我々は動く

べきなのです」

必死になって訴える少年。男は目を閉じ冷めた口調でいった。

「それまで待てと」

「左様」

「確かに、神無月は“陰”の力の最盛期……」

「いつきに落とすというならば……私はその頃こそ勝機かと」

「いつき、か………心配申すな 唯一刃向かう手だて、いや、奴等是我等の手の中にあるのだから」

手元たもとから決して美しいとは言えない濁った色をした4つの玉ぎよくを取り出しクククと笑った。

「全ては愚かな人の手によるもの」

「……」

「千二百年前と変わらない……同じだ だが奴等の血は薄れつつある 天の力をもつのはもはや我等だけだ」

胸の辺りに手の平を上げ、ぎゅっと拳を作った。

「”あちら”と”こちら”をつくったのは間違いだったようだな ふう……難儀なものよの」

目を細めて嘲るように言った。

「しかし!!」

「今から事を起こすのがちょうどよいのだ」

「……?」

「今にわかる 我等の脅威は神ではないことに」

男は堪えろと言わんばかりに少年の肩に手を添えた。

「ねえ 御影様、早く始めちゃおうよ!! 私早く外に出たいの」

赤い白拍子の装束を纏った女の子が御影の背中に飛び乗りきゃっきゃつと笑いながら言った。

「これ朱理!!」

「キャ!!」

黒い法衣を纏った男が朱理という少女の襟首を掴んで御影から剥がした。

「はなしてよこのハゲ!!」

「髪はある!!」

男は黙れと言わんばかりに乱暴に少女を肩に乗せた。

これが彼女の黙らせ方らしい。
乗せられた少女は頬を膨らませ男の短い髪を引っ張った。

「朱理！！」

「ふん」

「五月蠅いぞ 朱理 玄麿」

白の少年が睨みを効きかせて言った。

「連の方がうるさかったじゃん、この弱虫」

「なんだと！！」

「べ〜〜だ」

あつかんべーをしてからかった。

「お前は事のしだいがわかっておらぬから！！」

「よせやい 何ムキになってんだよ」

青い着物を着た青年が制止する。

「青…」

「まあお前達にはこの俺緑青様がついてんだ 時期なんか気にする
必要はねえよ それに、あんまり心配してつと禿げちまうぜ」

親指を立てて言った。

「……我々にそのようなことは無縁だ」

「冗談の通じねえ野郎だからガキに嫌われんだよな、朱理」

「ガキじゃないっての!!……!このでこっぱち!!」

「で……テメエもだろうが!!」

緑青は朱理の両頬をぐいぐい抓る。

「ちよ、痛いゝ痛いゝやめてよ!!」

緑青の手の辺りに小さな炎が現れ彼に向かった。

緑青は、一歩退き手を大きく振ってそれをかき消す。

「ちっ……やりやがったなあ
てめえは俺に勝てねえんだぞ、なあ」

「うるさい！！やってみないとわからないでしょ！！」

大男の上から飛び降り、臨戦態勢に入る。

「これ、朱理」

玄曆は止めようと手を伸ばすが手を叩かれた。

「黙っててよ玄磨!!」

「いい加減にせぬか、朱理!青!」

白い少年が言い放つ。

青い男は少女から目を離し青年に向かった。

「邪魔すんじゃないやねえよ 連 なんなら、てめえものしてやんよ」

手をぱきぱきと鳴らし挑発的に近づく。

「灸を据えぬとわからぬのか…」

白連は両手をがっちりと組む。

これが彼の戦闘態勢らしい。

この場は三つ巴となってしまった。

三つの気が反発し合い、空間が歪み始めた。

が、

バシンっ

一瞬にして空気が変わる。

音がした方、男の方に皆が注目した。

彼は藍色の扇子を勢いよく開いた。ただそれだけであつたのに……

「…流石、御影」

玄麿は恐れ入ったと感心して見た。

「己^{おの}が力をぶつけ合うのもよかろう…… だが、まだ相手はいる…… 違うか」

パチリと扇子を閉じにやりと意味ありげに笑う。

「はあ……あまり良い止め方とは思わんが…その通りだと思わぬか
おぬしら」

「…ちつ わゝってるよ へいへい 悪かったな朱理」

「謝らないでよ 気持ち悪い 御影様がいうならしょうがないなあ
」

「失礼いたしました…御影様」

三人から放たれていた闘う意志が消え、静寂が戻った。

「では、始めようか 風よ 水よ 炎よ 大地よ……」

「『はっ！』」

月はまた雲に姿を隠し、闇を再び取り戻させた――

〈睦月之章〉

1：始まり（後書き）

明けましておめでとうございます。（1月1日現在）

突然ですが僕が昨年たてた今年の目標は、“バトルストーリーを書く”というものでした。

ですので今日から新しい作品を始動します。

勿論、現在書いている君1をやめる訳ではありません。

どうしても1月から始めたくて始めたくて……。

始めたい願望とは裏腹に、昨年より増して超不定期の亀足更新になると思います。

こんな作品ですがお付き合い頂けると光栄に存じます。

ではどうぞ宜しくお願い致します。

2：兆し

ここはコダマタウンにある展望台。

この街の空を一望することができる広く閑散とした場所だ。星を見るには絶好の場所。

だが、流星群でもない限り、ほとんど人の姿はみらるない。しかしこんなところにも来る者は来る。

特にここは、とある宇宙好きの少年のお気に入りスポットなのである。

少年は後ろ髪を立て、頭の上には緑のレンズに白フレームでサングラスのような特殊な眼鏡を乗せている。

服装は以前愛用していた赤色のタートルネックと紺色の半ズボンではなく、対照的な藍色と青のタートルネックに白色の長ズボン、それに被るように赤いブーツを履いている。

手には緑に灰色が混ざったような指の出ているグローブを嵌め、左手にはこの時代には欠かせない携帯電子端末、ハンターV Gを持っている。

首にはマフラーが巻かれ、その下から少年が彼の父親から贈られた流星を模したようなペンダントを提げているのが見えた。

髪型以外何の変哲もないように見えるこの少年。

だが、この少年こそ、知る人ぞ知る、3度地球の危機を救った青き英雄、“ロックマン”なのであった。

「ううゝ 寒いね」

少年は手に”はぁ〜”と白い息を吹き掛けた。
まだ1月の始め。

新しい年を迎えたばかりで、寒いのは当たり前だ。

「こんなに寒いならもっと着てくればよかったよ」

ポケットに手をつ突っ込んで軽くジャンプし始めた。

少年以外に人はいない。

けれども彼は確実に誰かに話かけていた。

「……もう、何か答えてよウォロック！！僕一人で話してて、まるで変人じゃないか！！」

少年は左手のハンターV Gに向かって怒鳴りつけた。

するとハンターV Gから青い、獣のような”何か”がでてきた。

『るっせえ〜！！いつもは黙ってろって言ってるくせによ！！』

少年に負けじと怒鳴り付ける青いもの。

彼の名はウォロック。

F M星、基^{もとい}A M星の電波生命体である。

好戦的なF M星人だった彼には少年の父親、宇宙飛行士である星河大吾の乗ったスペースシャトル”キズナ号”を襲った過去がある。

しかし、FM王へ反旗を翻した彼は少年の元へと辿り着いた。
今ではスバル少年をサポートするウィザードであり唯一無二の親友である。

彼ら二人無くしてはロックマンの存在は有り得なかった。

ロックマンへの変身、言わば電波変換は、ウォーロックと少年との融合から生まれたものであるのだから。

「う…今は見てないよ ほら、雲がかかってるし晴れてても今日は月も出てるし…」

いつもの自分の台詞が耳に痛い彼はむくつとした顔で答えた。

『それもそうだな あ、でもおい、北には出てんじゃねえか、杓ひしやくが』

「杓ひしやくって……せめて北斗七星っていつてよ!!」

『どっちでも一緒だろ ほら、ノース・ポールでも探してこい 探険だ』

北を指差してカッコつけた。

「意味わかんない…」

少年はおかしなことをいう彼に対して溜息をついた。

『しかしだ、北斗七星つてくらいだろ 七つ星だろ』

「うん、そうだよ」

『今日は八つ見えるぜ』

「……うん」

少年は北の空を仰ぎ見る。

そこには確かに八つ星が輝いている。

「僕も気になってはいたんだ」

少年は目を細めて例の星を見た。

『新しくできたのか?』

「昔からあったものだよ 眼でみたのは初めてだけど… チョイナの戦国時代の軍師が星を見て吉凶を占ってね よくこの星のことが話になってた」

『ってことは出たら良いのか?悪いのか?』

「……………すごく悪い」

『……………変な電波は感じねえぜ』

「電波を放つてても流石にこんなところまでは届かないよ」

少年は頭に乗せていた、電波を可視化する特殊な眼鏡、ビジライザーを掛けた。

「ま、僕はこんな迷信信じてないけどね」

『気にしてたじゃねえか』

「不思議だなあって……………」

『不思議？』

「あそこだけ晴れてるのは偶然として、月があるのにあの星はあんなにも輝いてる……………」

少年は空を交差する電波の先に見える星を目を細めてみた。

『なんだなんだ？不吉なことでも起きそうってか？？』

「さあね」

ビジライザーを外してさらっと答えた。

「僕は占いつてさっぱりだからそんなことわかんないよ それより……さぶい……」

醸し出されていたシリアスムードを少年はぶるぶると震えながら壊した。

『お前……すっかり忘れられてんじゃないのか』

「そ、そんなことないよ」

『約束の時間はとつくの昔に過ぎてるぜ』

「そんな大袈裟な……まだ9時半だよ」

『1時間も待てば十分だろ』

「う……」

少年が星も見えない寒空の下にいる理由、それはとある人物との約束があったからだ。

普通の人との待ち合わせならいくら人の良い彼でも1時間も待たされてしまったら帰ってしまうだろう。

しかしそれをしないということは少年にとって、とても大切な人だから……

『待ちぼうけ　待ちぼうけ　ある日せつせと野良稼ぎ』

「ちょっとやめてよね！！別に兎を待ってる訳じゃないんだから」

『しょうがねえじゃねえか　あの授業の後からこの歌が頭から離れねえんだから！俺だって歌いたい訳じゃねえ』

ウォーロックが歌っていた歌はスバルの学校の漢文の授業で流された曲だ。

そう、彼が地球を最後に救った日からもう二年近く経っている。スバルはもう中学一年生なのだ。

「わかった、もうロックを学校に連れてかないよ！！」

『別に学校がどうか言っただろ！暇じゃねえか！』

「ハンターからよく抜け出してるじゃん！」

『うっせえ！つまんねえんだよ、授業が！！』

「なら良いじゃん！！」

『……あゝああ、人がせっかく寒さ紛らわせてやろうと話してやってんのによ』

いじけたのか単に話を反らそうとしたのかウォーロックは白々しい態度をとった。

「うう……そんな言い方ないだろう」

『まあ、一人でこの寒い寒い空の下、寂しく寂しく待っていてくれや、ククク』

「なんだよそれ」

『一緒に居てやってもいいぜ 俺は寒くないからな』

何故か勝ち誇ったようにいうウォーロック。
流石のスバルもカチンときたのか口をむっとさせている。

『いやゝ人間じゃなくて本当によかったぜ、ククク』

「……………人間じゃ……………ない……………ニヤリ」

ある言葉を耳に入れた少年は不適な笑みを浮かべた。

『あ?……………ああ!?!』

「ウィザード・オン、ウォーロック、ビーニングスタイル!?!?!」

「わ、わわわやめろ……!!」

スバルは高らかに言葉を叫びながら、ハンターV.Gのボタンを押した。

するとどうしたことが、ウォーロックの周波数と共に彼の姿が変わってしまったのだ。

獣のような姿はまるで、いや、人間そのものになってしまった。

ウィザードが人により近い形で電波世界外での活動を可能にするプログラム、それが”ウィザード・オン・ビーニングスタイル”なのだ。

このスタイルが生まれたのは偶然の賜物である。
機会があればまたお話しよう。

高度な技術であるとともにある一定の力を持つウィザードにしかできないこともあり、まだ世の中には一般化しておらず、このスタイルが可能なのは彼を含め7体の電波体だ。

この時代という警察、サテラポリスの遊撃隊とそれをサポートする者のウィザードだけが持っている力だ。

ウォーロックの容姿は青い髪に釣り上がった目、端の方で二つに別れた眉毛は特徴でスバルとはまた少し違った尖んがり頭をしている。一言でいうと眼を合わせただけで喧嘩を売ってきそうな恐いお兄さん……。

「ば、ばかやろ……!!こ、こんな寒い日に…人型に…す、

するんじゃない…ねえ、ブア〜クション!!」

「どこかカンに障ったんだよ」

「戻せ!!」

「いつもは人型にしろって言ってるくせに!!」

「今一言も言っていないだろうが!!」

「ならさっきの僕への態度、謝ってよ!!」

「けっ、やなこった!!」

「寒いんでしょ、ロック、ねえ、長袖の僕だって寒いんだから」

「く……」

人により近い形、よって普通のウィザードにはない味覚、嗅覚、触覚が備わっている。

寒さも例外ではない。

しかも彼の服装は長ズボンはいいとして……袖無しのタンクトップのようなものだった。

流石に……寒い。

「……………戻さないなら自力で戻るまでた!!ウィザード・オ「オン」

……………

「……………ウィザード・オ「オン」」

……………

「……………オ「オン」」

何やらスバルとウォーロックのオンオフ合戦が勃発したらしい。

ウォーロックが”オフ”といい、すかさずスバルが”オン”というてボタンを押している。

なんとも白熱した勝負だ。

スバルの隙を見ては”オフ”を繰り出すウォーロック。

そして消えきる前に目にも留まらぬ速さで”オン”を実行するスバルだ。

端^{はた}から見ると……………際限なく阿保らしい。

彼等にとっては真剣勝負だったに違いないが。

「オフ」

「オン」

「オフ」

「オン」

「オフ」

「オン」

「オフサイド」

「オン……………あっやられた」

ウォーロック選手のフェイントが決まった――

まあスバルが策略にはまったことに満悦だったようで、せつかくの戻る機会を失ったことは彼には内緒にしておこう。

「へへ、ざまあみやがれ……………って違あう！…！何せせこましいことやってんだよ！…！」

「ロックがしつこいんじゃないか！」

「お前がしつこいんだろ！ガキみたいなこというな！…！」

「なんだよ、ロックの方が……………というか……………結構あったまったね」

「ん……………まあさつきよりはな」

「でも寒いね」

「まあな」

「もう少し付き合ってよ」

「……………たく……………少しだけだぞ」

そういつてウォーロックはスバルの頭をぐしゃつと撫でた。

「うん……………／／／／／」

少年はこうされるのが嫌いじゃない。

なんだかあったかいから。

なんだかんだで二人の喧嘩は収まった。

いや、最初から喧嘩なんてしていなかったのかもしれない。

「……………そもそも俺はあいつに会いたくねえんだ」

「どうして？いつも仲良くしてるじゃない」

「お前らが良い雰囲気になるといつもこゝこゝやって引つ張るんだ」

口に指を入れてぐいぐいと頬を伸ばした。

そんな彼をみてくすつと笑った。

「でも僕ら良い雰囲気になんてなったことないよ」

「……………はあゝ?!」

「そりゃドキッとすることはあるけど……………僕なんかが相手にされる訳ないじゃないか」

へらつと笑うスバルに啞然とするウォーロック。

「……………お前……………まだ治らないのか、その……………」

「ん？　なんのこと？」

「いや………いい」

”その鈍感さ”

と続けようとしたがやめておいたらしい。

言って治るものなら彼はとっくの昔にフェミニストに大変身している筈だろうから。

（ま、今年も面白くなりそうだってことにしとくかな）

一人クククと笑っているウォーロックをスバルは不思議そうにみた。

「どうしたの」

「なあに、今年も世話になるぜってことだよ」

一瞬吹き抜けた風が彼の髪を揺らした。

「………よろしく、居候さん」

「あ、てめえゝ 居候っていうんじゃねえゝ!!!!」

スバルのこめかみをグーでぐりぐりする。

この光景はまるで仲の良い兄弟のじゃれあいだ。

「いったゝ あはは、ごめんごめん」

ギブアップギブアップとウォーロックの手をぱんぱんする。

「わかりやいいんだよ、ふん」

「あはは それより、本当遅いなあ… やっぱり仕事大変なんだね」

やはり痛かったのか、こめかみを押さえながら言った。

ウォーロックは素っ気なく”さあな”と言った。

「大変かどうかはわからねえが………来たみてえだぞ」

ウォーロックが親指でくいつと指し示した方角をみると、そこからこちら目掛けて向かってくる赤い閃光が見えた。

少年の待ち人がやって来たのだ。

2：兆し（後書き）

お久しぶりです。

主人公がいまま放置してしまっていました…いやはや。

それでもアクセスして下さった方々ありがとうございます！

読みにくいことこの上なくて申し訳ありません。

さて、色んなことをちりばめ過ぎてしまいました。

色々意味を考えてみてくださいw

この回が活きるか死ぬか……（汗）

二つのみ説明を。

ウォーロックが歌っていた歌は有名だと思います。

僕の中1の頃の漢文の時間にこの歌を先生が流してくれました。

スバル君の学年をあらわすために使ってみました。

裏話をするところの作詞をされた超有名な詩人が使われていた詩号のつけ方が僕のこの話と少しだけ関連があったので引用させていただきました。

もう一つは擬人化について。

これは僕の小説ではお馴染みの設定です。

笑って受け入れてやってください（笑）

いつかお話できればいいと思っています。

では、

お読みいただきましてありがとうございます！！

3：待ち人来たり（前書き）

やっとスバミソできそうですw
うちのスバル君は”甘い”です（笑）

3：待ち人来たり

光の正体は、金髪で赤いヘルメット、赤いコスチュームを着て水色のギターを持った女の子だった。

「ごめんなさいスバル君！遅くなっちゃって」

女の子は深々と頭を下げて謝った。

「いいよいいよ、気にしないで」

スバルはとんでもないという風に手を振った。

「仕事が忙しいのは知ってるし、約束したからね」

そう優しく笑いかけると女の子は顔を上げ、にっこりと微笑み
「ありがとう」と言った。

『言ったでしょ、スバル君なら待っていてくれるって』

突然ギターが喋りだした。

「うん、ハープが言った通りだよ」

今の声は彼女のウィザード、ハープのものだ。

彼女のこの姿はスバルがウォーロックと電波変換をしてロックマンとなるのと同様に電波変換してハープ・ノートとなった姿だ。

因みにハープは琴座のFM星人。

通常時は名前通りハープのような形をしている。

「僕がどうしたの？」

二人の会話がみえないスバルは疑問符を浮かべて聞いた。

女の子は、しまったあと片手で顔を覆い、ばつの悪そうな顔をした。そして苦笑いをしながら申し訳なさそうに答えた。

「えっと……ね スバル君がね、もう帰っちゃってるんじゃないかなあって…思ってた」

スバルはそんなことがある訳ないと慌てた。

女の子は”だからあんまり言いたくなかったの…”とぽつりと呟いた。

『だから言っておいたのよ” 例えロックが帰りたいだの忘れられ

てるだのなんだかんだうるさくても、スバル君は必ず待っていてくれる”、ってね』

ハーブはクスリと笑うように話し、これを聞いた少年は即座に自分の思いを放った。

「ハーブの言う通りだよ　どんなことがあっても僕は君を必ず待っているし……君を置いてどこかへ行ったりしないから」

「スバル君……／＼／＼／＼／」

傍^{はた}からみると少年が女の子に愛を告白しているみたいだった。言った少年は少し気障^{きさう}っぽかったかなと照れて後ろ頭をぐしゃぐしゃと掻き、言われた女の子は頬を染めて幸せそうな顔をしていた。

（あなたならそういう風に言ってくれらると思っていたわ、スバル君）

一体の電波体はそう微笑んでいた。
自分をだしに使われたことに不満そうな電波体もいたけれど。

3：待ち人来たり（後書き）

僕はスバル君に臭い台詞を言わせるのが大好きですw
お読みいただきありがとうございます。

4：待ち人は無頓着（前書き）

お久しぶりです。

4：待ち人は無頓着

女の子は電波変換を解いた。

久しぶりなのだから二人で話せば良いとハーブが女の子に耳打ちしたからだ。

女の子は照れながらも快くその申し出を受け入れた。

まばゆい光りが女の子を包み、その女の子の本来の姿、赤い髪とエメラルド色をした瞳が印象的な今を時めく国民的シンガーソングライター、響ミソラが現れた。

「大丈夫？そんな薄着で」

スバルが1番に思ったのはこれだった。

ミソラはスバルに言われたので顔を身体のおちこちに向けながら自分の服装を確認した。

ミソラは少し前までは毎日といっていいほどピンクと黄色の縞々のインナーに可愛い薄ピンクでフードに二つお団子が付いているようなパーカーを着て、薄黄色の半ズボンを履いていた。

が、今では臍^{へんじ}脂色のインナーの上にクリーム色でボタンが沢山付いているようなパーカーを着て、群青色の半ズボンを履き、手には少年と同じようなグローブをはめていた。

赤い髪は目深に被った濃い緑色のような帽子でほとんど隠れている。

「寒くないよ」 多分服の色のせいだよ」

「そうかな……」

「帽子も結構暖かいし、半ズボンだって寒くないよ 若いもん♪」

ケンケンしたり、ジャンプしたり、まるで小さな子供みたいに、自分が元気なことをアピールしている。

服装を今までの暖色系系統から変えた理由はこうだ。

知名度がもはや世界レベルに達している彼女は、大きくなるにつれてファンを大事にする気持ちが廃れている訳ではないけれど、プライベートを他人に害されることに嫌悪感を抱き始めたので、できるだけ目立たないようにしている……… という訳では全くない。

周りの目等殆ど気にせず、変装する気等も全くない彼女の私生活を心配していたのは本人ではなく彼女のウィザードだった。

ピンクは彼女によく映えるけれど、目立ちすぎていつの間にかファンが後ろに行列を作っていたこともあった。

こうしたこともあってほぼ寒色系の服を彼女のウィザードは選ばせたのだ。

派手好きだったウィザードに目立つ格好をやめなさいと言われるほ

どそついうことに無頓着なアイドル、それが”響ミソラ”なのでした。

以前と変わらないのは藍色のブーツを履いていることと、彼女の母から貰った黄色いギターを背負ってることくらいだろうか。

「…っていつでもやっぱり寒いかな」

スバルの前でラストにジャンプし、シュタッと静止したミソラはえへへと笑いながら言った。

それみると言わんばかりにスバルはため息をついた。

「スタジオはあったかかったからよかったんだけどね、あははは…
………っう」

両腕を摩り、縮こまってしまった。

電波変換をしているときは大抵のこと（自然による暑さ寒さ、水中、宇宙空間での活動等）には適応しているため、この寒さを感じていなかった。

急いで来たためか防寒着らしいものは一切身につけていなかった。

フワッ

ミソラの首に温もりがきた。
驚いて目の前のスバルを見る。

「だ、大丈夫だよ スバル君が寒いよ」

「僕は平気」

スバルは自分のしていたマフラーをミソラに巻いた。
いいよと返そうとする彼女のいうことは聞かない。
終いに

”大人しく僕のいうこと聞いてよね”

と彼女の額にこつんと自分の額をあてた。
するとミソラは真っ赤になって弱々しく首を縦に振った。

「さっきまでは寒い寒い言ってたくせによ」

『ちよつと!』

ちやちやを入れるウォーロックをハーブは頬を抓って諫めた。

「いてててて!!」

「あ、そうだ 出してよロック」

スバルは騒がしい二人を見て何かを思い出したようだ。

「んがっ　いつてえ……この姿のままで出すと結構グロいぞ」

「あ、うん　戻すよ」

スバルは抓られたところをすりすりさすっているウォーロックのビ
ーニング・スタイルを解いた。

ウォーロックは”うゝ寒かった”と言いながら自身の身体から電波
化していた物質を取り出した。
物質の電波化はA M星人の能力によるものだ。

「重箱？」

「うん　おせちだつて」

スバルはウォーロックからそれを受け取りミソラに渡した。
ミソラはきょとんとして重箱を見た。

スバルはおせちは彼の母、あかねが作ったものであると告げた。
彼女は以前ミソラにお正月にはおせちを作つてあげると約束してい
たらしい。

しかし、年始にはお正月特番やニュー・イヤー・コンサートがあつ
たためミソラは星河家を訪れることはなかった。

そのためあかねは今日ミソラに会うといっていたスバルに約束の
ものを託したのというわけだ。

「覚えて下さったのね、お母様！！ありがとうスバル君！」

「それと、お雑煮食べにおいでって」

「本当に？」

「連絡くれたらいつでもつくるってさ」

「やったー！フードディスプレイでお正月すごすのは本当味気無かったんだよね…忙しくて作れなかったし　すっごく嬉しい！お母様の手料理大好きだもん」

「本人にいつてよ　きっと喜ぶから」

重箱を宝箱のように大事そうに抱える女の子を男の子は頬笑ましく見ていた。

『なあハープ』

『なあにKY』

『いや、今日は別にそこまでした覚えはねえぞ』

『あらごめんなさい、名前忘れてたの』

『……………』

『で、なあに？』

『あれは”良い雰囲気”っていうんだよな』

『少なくとも私はそう思うわ』

『だよな』

『じれったいって？』

『そんな感じだな』

『やっぱりもつと早く行動すればよかったのよ、ミソラ』

『スバルはスバルで相変わらず鈍感なまんまだしよ 見てるこつちがもどかしいぜ』

『もどかしい？そんな風に言えるようになったのね』

『けっ、どうとでもいいな』

『大丈夫よ お互い好き合ってるのは確実なんだから』

『別に心配してるとかじゃねえよ』

『嘘おっしやい』

『ん、んな訳ねえだろ あいつとミソラが付き合っちまったらお前

「ともつと顔合わせなきゃいけなくなるんだぜ」

「あら、嬉しいでしょ」

「はっ、ごめんだな」

「ふふ、まあそれはそれね　とにかく私達ウィザードは楽しい一年をパートナーが過ごせるようにするだけよ」

「だな」

二体のウィザードは傍らでパートナー達をそれぞれの思いを馳せて見ていました。

4：待ち人は無頓着（後書き）

お久しぶりです。

お正月の話を四月に書いてる里子です。

高3故毎日が忙しくなりつつあります。

下手したら今年最後の更新かも（笑）

では後書きを

……スバル君甘いよw

付き合ってもない女の子に”おでここつん”とか（笑）

とにかく説明文が長いので、ごめんなさい（土下座）

テンポが全くないですね（汗）

大変やなあ、これってブランクなんですかね？

まあ次回から物語が走る予定です。いつ更新するかはわかりませんけれど……（アタフタ

お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2407j/>

流星のロックマン ～時を越えた思い～

2010年10月9日23時02分発行